

## 目覚めのコーヒー

熊本県熊本市 薄井千穂(53)

休日の午後によくコーヒーをいれた。お湯で蒸らしたコーヒーの粉から立ちのぼる香ばしい香り。ドリップパーからサーバーの中に落ちる美しい琥珀色。コーヒーカップは、ウエッジウッドのワイルドストロベリー、ピンクのような青のよな紫のような色の萩焼、福良雀のついた唐津焼、気分によって選んだ。リビングのテーブルでコーヒーを飲みながら、庭を眺める。窓からはやさしい風が流れ、光が射し込んでいる。体の中のごつごつしたかたまりが溶けていくそんな時間だった。

それが地震で失われたのは、まだ寒さの残る4月。1回目の震度7でドリップパーもサーバーもコーヒーカップも欠片になり、2回目の震度7ではテーブルが木片になった。目の前にある倒壊した我が家は、台所の勝手口が斜めに倒れ、ドア付近には食器棚に納まっていたはずの赤いドリップコーヒーパックが散乱している。目に映っているだけで見えていないとはこういうことなのか、それをどう

しようとも思わずに、散乱したコーヒーパックは雨ざらしのままになっていた。あの日から家の中のたたずまいを思い出し、ぼうっとすることが多くなった。視界に紗がかかり、世の中が遠くに見えるようだ。落ちていたコーヒーパックをやっと集めて持ち帰ったのは1ヶ月以上もたった頃だった。

仮住まいで持ち帰ったコーヒーをいれてみた。放置していた環境が悪かったせいか、コーヒーの香りに少し焦げたようなにおいが混じる。それでも一口含むと以前感じていた味と香りが、なつかしくよみがえってきた。

「そろそろ目を覚ませ。」

語りかけられたような気がした。そうだ、ドリップパーとサーバーを買おう、コーヒーはここにもあるんだ、ごつごつした大きなかたまりをすこしずつ溶かしている、と思った。